

日本人語学留学生のコミュニケーション行動 —異文化接触と第二言語習得研究からの理論的枠組み構築—

Japanese students' L 2 communication in ESL schools :
A conceptualization from intercultural contact and SLA research

小林 葉子
Yoko Kobayashi

ABSTRACT

Theoretical arguments and empirical evidence have ascertained the interrelatedness and multicomponentiality of WTC in a L2 in tandem with other constructs that affect L2 communication. Given the intricacy of individual and contextual facets operating in the L2 communication, pervasively the unwilling one, the conceptualization of WTC and other interrelated variables in specific contexts is pivotal to guiding the implementation and accumulation of context-specific L2 use research.

Focusing on Japanese students enrolled in overseas ESL schools, i. e. one of the most highly marketed yet the least researched educational settings, this conceptual study seeks to establish a contextually sensitive theoretical frame by forging an interface between the knowledge base from the applied linguistics community, in particular SLA research and that from intercultural contact one. The starting point for this theory-based attempt is to contextualize the WTC in a L2 model from the former domain and the model of acculturation process from the latter with both individual and situational variables hypothetically identified from the models. Empirical research is to be conducted with an ultimate aim of scrutinizing the extent to which those variables impinge on Japanese students' communication with other students in English in a context where such opportunities are ample.

Key words : overseas study, intercultural communication, SLA(second language acquisition),
WTC(willingness to communicate), ESL(English as a second language)

はじめに

近年先進国出身の学生たちによる海外語学留学は形式が高校・大学間の交換留学プログラムや個人留学に限らず、その目的が個人レベルのものである場合がほとんどである。学術調査は異文化適応と目標言語習得における過程と結果の視点から研究がなされているが、インタビューや半構造的アンケートなど参加者からの記述的データに基づいた研究として、留学中のもの (Kinnell, 1990 ; Lee & Wesche, 2000 ; Murray, 1999 ; Swain & Miccoli, 1994 ; Talburt & Stewart, 1999 ; Zhang, 2001)、留学中と帰国後のもの (Allen & Herron, 2003 ; Crealock et al., 1999)、帰国後にデータ収集したもの (Armstrong, 1984) がある。さらに留学中ホームステイ宅との会話データを分析したもの (Knight & Schmidt-Rinehart, 2002)、ホストファミリーとのインタビューに基づくもの (Schmidt-Rinehart & Knight, 2004 ; Wilkinson, 2002)、共同プロジェクトに取り組む留学生とホスト国大学生との力関係を考察したもの (Leki, 2001) に加え、最近では長期的な質的研究 (Kinginger, 2004 ; Wilkinson, 2001) も発表されている。日本人研究者の多くは心理学的枠組みから統計的・量的研究手法を用いて

いるが、その第二言語習得学における着目点は学習方略頻度 (Taguchi, 2002)、語用論的運用能力の上達度 (Matsumura, 2001)、自民族中心主義傾向 (Hinenoya & Gatbonton, 2000) など様々である。最も大規模・長期的な調査としては、1987年から1996年にかけて日本人高校生から、留学前・留学中・留学後を通して量的・質的データを収集した八島による研究 (八島, 2004a; Yashima & Tanaka, 2001; Yashima et al., 2004など) が挙げられる。ただ研究傾向としては、現在の所属機関 (高校、大学) や主催団体が募集した参加者が集団で同じ現地校に留学する交換留学プログラムに焦点を当てた研究が多く、留学の最も一般的な形である英語圏語学学校への個人留学については、その圧倒的な需要の高さとは対照的に学術的研究の蓄積が限られている。

異文化カウンセリング学が注目するように、異文化適応過程はカルチャーショック (Oberg, 1960) という顕著な形でなくともストレスや不安の連続である (Berry, 1988)。したがって異文化コミュニケーション研究の理論的枠組みとして未だに強い影響力を持つボクナーの友人機能モデル (Bochner et al., 1977; Ward, 1996; Ward et al., 2001) が提唱するように、同国出身者同士の交流は精神的支えとなり否定されるべきものではない。本研究も同国出身者同士の交流が異文化適応過程に果す有効性について否定する立場ではない。しかしながら語学上達を目的とする留学生を対象に教育を提供することが前提となっている語学学校においては、留学生たちが排他的に同国出身者と第一言語で交流することは異文化間交流・語学上達両面から理想的ではなく調査すべき研究課題である。

理論的背景

異文化適応過程を円滑にするために不可欠な要素であるソーシャル・スキルについて、異文化教育・異文化トレーニング教育分野から理論・実証研究に基づく具体的な試案や実施マニュアルが提示されている (田中, 2000; Cohen et al., 2003; Paige, 2003)。しかし英語圏語学学校というコンテキストではまだ実証研究の蓄積がなされておらず、具体的に各語学学校における留学生間の交流を促進するソーシャル・スキル実施程度とその背景にある政策については明らかになっていない。ただし最近の研究により、第二言語としての英語教育現場における教育方針やスタッフの意識がホスト国からみた留学生という単純化された二分法に依存しがちであることが指摘されている。

異文化コミュニケーション学における異文化接触研究では伝統的に西欧とアジアとの比較を軸に留学生の異文化適応に焦点を当て、集団主義対個人主義、高コンテキスト文化対低コンテキスト文化、といった二項対立的概念を形成した研究が蓄積されている。が一般受けしやすいその概念が往々にして単純化され、ステレオタイプ的な見方を特定の地域の学生たちに当てはめてしまっている面は否めない。例えばアジア系学生が集団主義を好み、教師に対し従順であり、ウチとソトの区別を明確につける、という見方 (Gudykunst & Kim, 2003) は第二言語教育領域にも浸透し、英語圏において英語を第一言語としない移民や留学生たちへの英語教育に携わっている関係者たちの意識に影響を及ぼしている (Kumaravadelu, 2003)。英語圏だけでなくアジア諸国の研究者からもアジア系学生 '特有' の思考と行動傾向の存在を肯定した上で、アジア系学生への理解促進を目的として儒教の教えを枠組とした理論的説明・研究が試みられている (Wen & Clement, 2003)。

二項対立的概念に対する根強い支持がある一方、近年は自己主張を議論への参加・寄与ととらえる西洋文化思想がこのような概念の基盤となっているという認識に基づき (Kubota, 1999; Kumaravadelu, 2003; Pon et al., 2003)、固定観念化されたアジア系学生のイメージに相反する行動を報告する研究結果が英語圏とアジア諸国双方の研究者たちにより発表されるようになってきている (Cheng, 2000; Ha, 2004)。さらにアジア系学生特有であるとされてきた行動パターンが海外におけるアメリカ人留学生の間でも見られることを報告する研究

も相次いでいる (Talbert & Stewart, 1999; Wilkinson, 1995; 2001)。

同様に異文化接触研究においては「ホスト国と出身国の文化が類似しているほど適応に有利である」という文化間距離仮説 (Babikar et al., 1980) に反し、中国・香港・シンガポールなど同じ中華文化圏間の移動においても異文化適応の苦勞が決して軽視できないものであることが大学生やビジネスマンを対象にした研究によって報告されている (Selmer & Shiu, 1999; Tsang, 2001)。さらにUカーブやWカーブといった異文化適応過程のモデルに当てはまらないケース (Church, 1982; Ward et al., 1998) やホスト国と出身国が同じ‘文化’圏であるからこそ問題が意識化される例 (Sakamoto & Kobayashi, in preparation) などの報告から実証されるように、ますます多様化する海外における異文化適応研究課題に取り組むにあたり、まず文化ありきの文化本質主義 (馬淵, 2003) を土台にして構築された二項対立的な概念を用いて変数間の相関関係を説く仮説には限界があることは明らかである。

これらの研究報告を受け、特定の地域出身の留学生行動パターンを一般化しようとする前にまず留学生の文化的・社会的背景や留学生が置かれている状況、その背景や状況が留学生に与える影響、さらにその状況に対して留学生が再構築していく主体性・アイデンティティについて考察する必要性を主張する声が上がっている。日本における英語教育・第二言語習得研究ではまだその動きは活発化していないものの、異文化間教育・異文化コミュニケーション研究においてはポスト実証主義的なアプローチをとった研究 (馬淵, 2003) などその声に呼応する研究が発表されるようになってきている (浅井, 2002; 戴, 1999)。

そのような新たな動きを後押しているのが社会構築主義的アプローチとVygotskyの社会文化的理論を基盤とする社会文化的・状況論的アプローチである。これらのアプローチを取り入れ言語教育の分野において最近特に海外で研究が盛んに行われているのが、英語を第二言語 (ESL, English as a second language) とし学びながら正規のカリキュラムを履修しなくてはならない、アメリカの高校・大学・大学院に在籍しているアジア系留学生や移民の子弟に焦点を当てた研究である (McKay & Wong, 1996; Miller, 2004; Pavlenko & Blackledge, 2004; Pon et al., 2003)。担当の教師や家族からのインタビューや観察などによる研究調査によって、留学生・移民の学生たちの文化的・心理的・社会的・言語的適応過程とその度合いをミクロ的に考察し、例えステレオタイプに当てはまるような消極的かつ集団的な行動をとるアジア系学生たちであっても、実際には複雑に心理が揺れ動き様々な葛藤を抱えながらも自己構築しつつ学校生活を送っている実態が明らかにされている。

これまで日本の第二言語習得学・応用言語学において語学留学生を対象にした研究といえば、社会心理学を理論的枠組みとし留学前後に言語テストを実施しその差を統計的に調べるのが主流であった (Iwakiri, 1993)。近年心理学的枠組みのなかでまとめられた八島 (2004a) はアメリカ留学中の日本人高校生たちに見られる異文化適応過程と英語力の上達を大規模かつ長期的に調査したが、「応用言語学と異文化コミュニケーション研究の狭間で欠落していた第二言語コミュニケーション研究の視点を行動科学的な知見で補う」(41) ことを目指したその研究は、これまで交流が限られていた第二言語習得学と異文化コミュニケーション学をつなげた貴重な文献になると思われる。第二言語習得研究全体の流れとしては、質的・解釈的研究と認知的・実証的研究の橋渡しとしての構築主義認識論の有効性についての国際レベル議論は見受けられる (Wendt, 2002)。また全く別の方向への動きとして、社会心理学的枠組みから離脱し批判的人類学や批判的教育研究などに新たな理論的枠組みを見出そうする動きも顕著であるが、その一例がこの新分野の専門ジャーナル、*Critical Inquiry in Language Studies: An International Journal* の2004年度の創刊である。

社会心理学を基盤とする異文化コミュニケーション学においても構築主義的な観点に対する認識は広まっているが、量的研究が支配的な中質的研究への受け入れは非常に限られているのが現状である (Arthur, 2001; Selmer & Shiu, 1999)。異文化接触研究の古典的文献であ

る箕浦（1984）についても、本人が述懐し自らのデータを構築主義見地から検証し直しているように（箕浦、2003；2004）、異文化適応過程を実験の連続ととらえる観点から抜け出すことができるようになったのは最近のことである。今後も影響力が衰える事がないことが明らかである行動主義的・本質主義的な社会心理学の枠組みのなかに、いかに構築主義的観点を取り込んでいくのか、また穏健な立場をとるにしろ反実証主義、構築主義、社会構成主義、認識的相対主義といったパラダイムを枠組みとしつつ、その一方でデータに基づく視覚的な理論モデル構築を目指す方法論を用いていくことができるのか、という根本的な問題については応用言語学分野においてもその議論が始まったばかりである：

When one has lost faith in such categories [constructs], analytical rigour becomes much harder to attain, and the discourse of language and identity risks passing beyond mere fuzziness and into a realm of pure rhetorically driven tautology. The methodological ideal is therefore to strive for the intellectual rigour of essentialist analysis without falling into the trap of believing in the absoluteness of its categories, and to maintain the dynamic and individualistic focus of constructionism while avoiding the trap of empty relativism (Joseph, 2004, 90).

応用言語学のみならず、理論構築・学術的知見と教育的示唆の距離間について常に議論が絶えない教育心理学、第二言語教育学、異文化間教育学といった教育分野においても、構築主義を理論的枠組みとしながら結局は二分法概念構築に終始してしまうのでは、各分野による学術的あるいは教育的発展いずれにも寄与できないことは明白である。

日本人留学生による英語でのコミュニケーション：理論的枠組みの構築

以下では英語圏語学学校の授業外でのコミュニケーション場面に焦点を当て、そこに在籍する日本人留学生が英語を用いて交友関係を築いていく際に必須となる英語でのコミュニケーション行動に影響する変数を、第二言語習得学と異文化コミュニケーション学のそれぞれの概念的モデルを元に見極めていく。

前半では第二言語習得学から概念化されているWTC in a L2 (willingness to communicate in a second language) モデルに注目し、英語使用、つまり英語でのコミュニケーションに影響する個人的・状況の変数を概観し、今後の実証研究のための理論的枠組みを構築していく。WTCはこれまで長年に渡りGardnerらによって研究され続けている動機づけ (Gardner & Lambert, 1959; Masgoret & Gardner, 2003) よりも実際の第二言語使用という被説明変数に直接影響を及ぼす説明変数である。日本の英語の授業とは異なり、英語圏における語学学校では英語を実際に使う機会が格段に多い。従って語学留学している日本人留学生の英語使用状況や英語を使つての友人関係構築について調査する本研究の理論的枠組みとしては、従来の動機づけ（ここでは語学留学目的・理由）をも包括的に組み込んだWTC概念に注目し、その構成要素を英語圏語学学校というコンテクスのなかで考察しながら、重要と理論付けられる説明変数を見極めていく。

後半では異文化接触研究において概念化されその後洗練され続けているacculturation model (Ward, 1996; Ward et al., 2001) を取り上げ、本研究の理論的基盤としさらに考察していく。異文化適応過程を概念化したこのモデルは前半の第二言語使用に関するWTCモデルの概念領域を含んだより包括的なものである。個々の異文化コミュニケーションの場面における言語コミュニケーション度は異文化における生活への適応度を大きく左右するため、言語使用は異文化適応過程の重要な要素であると言えるが、コミュニケーション度だけで異文化適応度を説明することはできない。第二言語コミュニケーションモデルとさらに包括的な異

文化適応モデルという二つのモデルを本研究の理論的基盤とすることにより、英語圏語学学校における日本人留学生の英語によるコミュニケーション程度だけでなく英語上達や交友関係構築に関する達成感や満足感をも考察することが可能となると思われる。

最後にまとめとして、ふたつのモデルを総括し本研究に取り組み説明変数と被説明変数を具体的に整理する。

Willingness to communicate in a L 2

第二言語習得学分野にWTC概念を導入したMacIntyreらはその代表的理論文献のなかで *Willingness to communicate in a second language* を、"a readiness to enter into discourse at a particular time with a specific person or persons, using a L 2" (MacIntyre et al., 1998, 547)、と定義している。WTC in a L 2 は英語圏で実証研究され (MacIntyre et al., 1999; MacIntyre et al., 2002)、その後英語が外国語であるEFL (English as a foreign language) 諸国でも調査が盛んになされるようになってきている (Yashima, 2002; Yashima et al., 2004; Wen & Clement, 2003)。この概念モデルは「第二言語習得の個人差研究の系譜で、カナダを中心として発達した異文化接触と態度・動機、不安・自信などの研究の延長として提示されたもの」(八島, 2004b, 13) であり、「異文化間の態度・接触動機など民族間の関係や社会的状況に影響を受ける要因と、性格や第二言語能力・自信など個人の要因が、複雑に組合わさって第二言語使用に影響を与える様相」(13-14) を示している。ただし彼らのモデルは、ネイティブスピーカーという集団・個人、そして彼らを取り巻く英語圏文化の存在を前提に、その対話者を前にした英語学習者というノンネイティブスピーカーがコミュニケーションする場合どのような要素がその行動に影響を及ぼすか、について概念化したものである。したがってこのモデルをそのまま英語圏語学学校における英語学習者たちのコミュニケーション行動に応用することはできない。このモデルを理論的基盤にしつつ、英語圏語学学校における日本人留学生の英語でのWTCの理論的枠組みを構築していく全過程において考慮すべき重要な変数が、第一言語を共有する同じ日本人留学生の存在である。

倉八 (2002) は「対話的能動性のない日本の若者」に衝撃をうける在日留学生たちからの声をまとめ、田崎 (2002) は実践研究として日本の大学院において「母語の異なる学生間のコミュニケーションが活発に行われていないという現状認識」(140) を踏まえ、担当する「異文化間コミュニケーション学」クラスにタスク活動を導入し留学生と日本人学生間の相互理解と交流を促進しようとした。これらの研究コンテキスト同様に、英語圏語学学校においても日本人留学生は集団を形成できるほどの構成人数がいることが多く、他の日本人留学生の存在は常に意識せざるを得ない状況である。対人関係能力や生活目標が欠如しているために留学生のみならず日本人学生ともうまくやっけていけない学生が多い (坪井, 1999) と指摘されている日本人大学生などが、同じ日本人と日本語が通じない他の留学生が混在する英語圏語学学校というコンテキストに身を置いた場合、WTCに直接的な影響を与えると考えられる変数 ("the most immediate determinants of WTC," MacIntyre et al., 1998, 549) である 'desire to communicate with a specific person' の構成要素の 'affiliation' や 'state communicative self-confidence' の構成要素である 'perceived competence'、'a lack of anxiety' らの観点からも、日本語での日本人話者とのWTCのほうが英語での日本人以外の留学生とのWTCよりも高くなる可能性が容易に推測できる。今後の研究課題は日本人との日本語での交友関係と英語での他の留学生との交友関係構築の機会が混在する英語圏語学学校において、日本人留学生たちの英語使用と異文化コミュニケーションを促進する説明変数の特定とその説明力の検証である。

Integrative/ intergroup motivation

他の日本人留学生が同じ教室や構内にいる状況が避けられない英語圏語学学校において、

日本人留学生たちが英語でのWTCを抱き実際の英語使用に結び付けていくことができるかどうかにか直接影響すると考えられる変数は、MacIntyre et al. (1998) のモデルではWTCより2段下の層に置かれている動機づけである。ただし彼らのモデルにおける動機づけは目標言語学習者がネイティブスピーカーという言語集団や個人へ抱く統合的動機付けである：

The integrative motive has inspired much of the prior research on language learning motivation, especially as it has been contrasted with an instrumental, practical-gain motive...it seems a firm conclusion that the desire to affiliate with people who use another language, and to participate in another culture, has a powerful influence on language learning and communication behaviour (MacIntyre et al., 1998, 551).

統合的動機付けの古典的な概念においては、'another culture' とは目標言語圏の文化でありその言語文化圏やそこで生まれ育った者たちへの同化願望傾向を示すものである。しかし英語圏語学学校においては、授業でのペアワークの際や授業以外の休み時間で学生が英語を使ってコミュニケーションする対象は他の学生たちである。もちろん日本人留学生というグループに属すひとりが別の特定の国からのグループたちに統合的動機づけを示す可能性は否定できない(例：韓国エンターテイメントに興味のある日本人など)。また逆に歴史的背景から今も熾りつづける日本とアジア諸国との政治的摩擦問題や中国への台湾帰属問題などの国家間の政治的問題が国民の外国観に及ぼす影響を考えると、特定の国からの留学生たちにはWTCを抱かない日本人やアジア諸国からの留学生の存在も否定はできない。さらに語学学校スタッフや校外の現地の人への統合的動機付けを抱く学生たちの存在も考えられる。

その一方で本研究のコンテキストにおいて英語学習者たちの英語使用に影響する説明変数としての動機付けを調査する際、統合的動機付けはMacIntyre らが説明するような "powerful influence" を及ぼすとは限らない場合も考えられる。この裏付けとなるのが第二言語として英語やフランス語を学ぶ環境(カナダのケベック州など)における実証的研究を元に構築されてきた統合的動機づけや道具的動機付けなどの概念が、第一外国語として英語を学ぶ多くのアジア諸国や東ヨーロッパ諸国への応用力について調べた調査結果である(Dornyei, 1990; Kobayashi, 2001; Yashima, 2002; Yashima et al., 2004; Warden & Lin, 2000)。英語が一般的に使用されていない社会背景に影響され統合的動機付けからの影響が皆無という台湾での調査結果(Warden & Lin, 2000)、中級までは道具的動機づけが支配的だが中級者から上級者へ上達していく際に統合的動機付けが鍵となるというハンガリーでの結果(Dornyei, 1990)、『international posture』という概念を示した日本での調査(Yashima, 2002)など、英語圏で構築・実証された理論とはずれのある結果が示された。

ネイティブの学生が学習環境に存在し自主的に英語を第二言語として学ぶ場合(例：アメリカの高校における留学生)やノンネイティブの学生ばかりが英語を第一外国語としてほぼ強制的に学ぶ場合(例：日本の高校生)とは異なり、日本人留学生にとっての英語圏の語学学校というコンテキストでは、校外は完全な英語圏という環境のため留学生にとって英語は外国語ではなく第二言語となるが、しかし教室では教員以外が世界中からやってくるノンネイティブの学生でありしかも日本からの留学生も多数存在する。英語圏以外で行われた先行研究結果や英語圏語学学校というコンテキストを踏まえると、統合的動機付けの古典的対象ではない他の国々からの留学生たちとの異文化交流に焦点を置く本研究においては、同化願望対象である言語・文化グループを規定した動機付け概念ではなく、個人・コンテクストレベルの要素により高い説明力を期待できると思われる。

Yashima (2002) は提唱する 'international posture' の構成要素として、"willingness to go overseas to stay or work" と "readiness to interact with intercultural partners" (57) を挙げているが、

前者の留学志向要素は日本人語学留学生全員がすでに示してことになる。本研究が着目する要素は後者の異文化コミュニケーション志向やその他の語学留学目的に関する動機付けである。Bochner (1972) は留学生の課題として、①若者としての成長、②学生としての学業の達成、③異文化適応と母国文化の伝達の三つを挙げているが、現在の語学留学事情では留学する個人的理由は様々であり、これまでの‘正統的な’理由にはあてはまらないような理由も考えられる。それらの語学留学動機付け構成因子を研究に組み入れることによって、英語学習と異文化コミュニケーションという被説明変数への影響について考察することができる。これまで動機付け研究がなされてきたコンテキストとは異なる特徴を持つ英語圏語学学校においては、従来の動機付けの概念だけでなく本研究の根ざすコンテキストを反映した動機付け概念の構築が不可欠となる。

Affective-cognitive context

MacIntyre et al. (1998) はWTCより3段下に位置付けたaffective-cognitive context層を構成する変数を、“individually based, representing accumulated prior history and broad-based attitudes and motives of an individual” (552)、と定義している。そのなかでひとつとして挙げられているのが言語学的能力、談話能力、表現内の行為能力、社会文化的能力、方略的能力という5つの構成要素から概念化されているコミュニケーション能力である。日本人留学生を対象にした研究においてもコミュニケーション能力を構成する特定な能力上達に焦点を当てた研究（例：語用言語学的能力とも解釈される表現内の行為能力に焦点を当てた研究、Matsumura, 2001）は見受けられる。しかしMacIntyreらが“WTC will be a function of how the individual perceives his or her competence rather than of its objective development” (555) と注意書きしているように、WTC in a L2 研究において焦点のひとつとなるのは、複合概念であるコミュニケーション能力全体の上達度とその測定ではなく、自己効力感ともいえる自己英語力感である。第二言語習得研究と異文化適応研究いずれにおいても多くの場合はこの立場から、質問紙には調査参加者である留学生たちに第二言語能力を自己診断してもらう項目を加え、その変数を「第二言語力」として分析に利用している場合が多い（田中、2000； 八島、2004a）。

日本人の英語力の低さが英語で話そうとしない理由だと日本社会一般ではよく言われている。また間違いを恐れる「日本人的特質」に消極性を帰属させる傾向も根強い。しかし実証研究を見ると、自己判断英語力よりも個人レベルでの動機付けや性格が英語でのWTCに強い影響を及ぼすことが示されている（性格はMacIntyreらのWTC in a L2 モデルによると最下層のsocial and individual contextに組み込まれている）。例えば八島（2004a）は民間の留学支援団体によって企画された公立高等学校交換留学プログラムにより一年間アメリカに留学した日本人高校生やその受け入れホストファミリーを対象に様々な調査を実施しているが、その中で渡米前に測定した高校生117名の英語力、現地でのソーシャル・スキル使用度、性格間の相関を調べている。その結果、英語力とソーシャル・スキル間の相関は低く、ソーシャル・スキルと性格間には有意な相関が見られた。さらに「全体としては、学校でのソーシャル・スキルの方がホストファミリーでのソーシャル・スキルより多くの項目で外向性との有意な相関が見られる」（八島、2004a、83）、とまとめている。

ただ八島（2004a）はアメリカ留学中の日本人高校生の異文化適応に有意な相関関係があるのは出発前に測定された英語力よりも外向性であるというこの結果の過剰一般化をせず、Ward (1996) などの関連文献を示しながら「適応に影響するのは性格そのものではなく、いかに個人の性格が滞在先の文化と適合するかだ」と正確に考察している（八島、2004a、131）。この指摘はアメリカ人白人女性が日本社会への適応と日本語習得する過程において、女性に求められる現地規範とのズレの問題から言語学習にも現地への適応にも障害が起きた報告（Siegal, 1995）とも呼応する。

性格は測定可能な心理学的変数であり、「恥ずかしがるのは日本人の特質だ」などの「イデオロギーとしての日本人論」と混同とされるべきではない (Kubota, 1998)。その一方で性格への評価は個々のコンテクストに左右される状況変数である。第二言語習得研究や教育現場においては、アジア系留学生への見方として性格という個人レベルでの視点が抜け落ち、逆に西欧に対する「アジア文化集団特徴」という二項対立的な視点や論理的な自己主張を成熟した大人としての証ととらえる西洋文化思想が浸透していることが指摘され始めているが (Kubota, 1999; Kumaravivelu, 2003; Pon et al., 2003)、社会構築主義の見地に立つそれらの先行文献はWTC in a L2という社会心理学的コミュニケーションモデルを取り入れつつも本質主義的な解釈に組みせずcontext-specificな視点に立つ複合的教育研究である本研究の理論的・概念的基盤を成すものである。

Social and individual context : ethnographic vitality

MacIntyre et al. (1998) モデルではWTCより4段下の最下層に位置付けられて入るのが上述した性格、さらに「社会的アイデンティティ理論」(Tajfel, 1974; 1981)と「民族言語活力論」で構成される‘intergroup climate’である。Gilesらによって提唱された後者のethnolinguistic vitalityを包括したspeech accommodation理論 (Giles, 1978; Giles et al., 1977)は80年代にBeebeらによって注目され、社会言語学におけるスタイルシフト研究への理論面での応用が試みられたものの (Beebe, 1988; Beebe & Giles, 1984; Beebe & Zuengler, 1983)、実証研究には結びつかず第二言語習得学へ大きな影響を与えるまでには至っていない。Williams (1992) による批評にあるように、社会学的な観点からは得られる知見は少ないものの、英語圏語学学校においては構成員である留学生母体は流動的である。特定の国籍からの学生が偏らないように入学者数やクラス配置をある程度配慮している語学学校が多い現状では、二カ国からの学生たちだけで一クラスが二分されることは考えられない。さらに生徒たちは複数の授業を受講しているためクラス間の移動も頻繁である。つまり英語圏語学学校においてはその流動的・多民族的環境上、社会学的カテゴリー化の理論を主軸に留学生たち同士の交流を考察するには限界があると思われる。しかしながら英語圏語学学校には日本、韓国、中国からの留学生が多いため、同国人同士が集団形成しやすい環境であること、そして根強い反日感情を韓国人・中国人留学生たちが「日本人留学生」という集団に向ける可能性を完全には否定できないことを踏まえ、社会的アイデンティティ理論や民族言語活力論を本研究の理論的基盤から完全に排除するべきではない。研究アプローチとしてはこのような取り扱いに慎重を要する研究課題は、ネットワーク測定のためのソシオメトリック・テストや他国民観の測定のためのSD法よりはむしろインタビューや参与観察法が望ましいと思われる。

A model of the acculturation process

社会レベル・個人レベルの変数が異文化適応経験とその結果に及ぼす影響については異文化接触学からの知見に得るところが多い。本研究のもうひとつの理論的基盤となるacculturation model (Ward, 1996; Ward et al., 2001) は以下のように説明されている：

It integrates both stress and coping and culture learning perspectives on acculturation, distinguishes psychological and sociocultural domains of adaptation and incorporates a range of micro and macro level variables, including social identity, as predictors of the adjustive outcomes. Accordingly, this model offers an organising framework for the synthesis of a large and diverse body of theory and research on the affective, behavioural and cognitive components of cross-cultural transition and intercultural interactions (Ward et al., 2001, 43).

ネイティブとノンネイティブ間の対話場面を主に前提としたWTC in a L2 モデルと異なり、このモデルは異文化適応過程とその構成要素である個々の異文化コミュニケーション体験に関するものである。ノンネイティブである留学生同士の英語でのコミュニケーション状況・英語を使つての交友関係構築に焦点を置く本研究の理論的基盤としては、WTC in a L2 モデルだけでなく、"intercultural interactions"研究に応用可能なこのモデルの有効性は高いと思われる。その一例としてこのモデルはソーシャル・サポート・ネットワークの異文化適応促進仮説を元に、下位概念としてソーシャル・サポートの質的・量的変数を組み込んでいるが、このソーシャル・サポートは異文化適応過程においては非常に重要な要素である。Ward (1966) において先行文献が概観されているように、特に同国人留学生は "the most salient and powerful source of social support" (136) であり、ボクナーの友人機能モデル (Bochner et al., 1977) を支持するものである。

第二言語習得研究においてはこのソーシャル・サポートという概念は理論的枠組みに組み込まれていないことが一般的である。アメリカに一年留学した日本人高校生の異文化適応と英語上達を大規模・長期的に調査した八島 (2004a) であったが、この調査においても高校生のソーシャル・サポート・ネットワークについてはサポートを提供する母集団を「知り合いになったアメリカ人全員」(104) だけに限定して分析を行っている。一方日本で学ぶ留学生の異文化適応を研究した田中 (2000) は、日本の国立大学に在籍する留学生237名からの回答から彼らのソーシャル・サポート・ネットワーク構造を分析したが、その結果はサポートの種類によってネットワーク・メンバーが異なるというBochnerやFurnhamらに代表される英語圏における先行研究 (Bochner et al., 1977; Furnham & Bochner, 1982) と一致するものであった。

The isolation of variables

以下ではこれまで概観してきたacculturation modelとWTC in a L2 モデルを包括し、英語圏語学学校における日本人留学生たちの英語使用と交友関係について調査する本研究が理論的基盤として取り入れるべき変数をまとめる。加えられる変数の中で年齢は第二言語習得過程や異文化適応過程においては重要な変数であるが、日本人語学留学生間では分散は微小だと考えられる。また性別についても伝統的な心理学的態度・動機付け研究に加え社会構築主義的見地からの研究総括 (Pavlenko et al., 2001) に示唆されるようにその重要性は実証されている。しかし本研究のコンテキストでは女性留学生の数が圧倒的であることが予想されるため、統計的分析においてはその変数の有効性には限界がある。さらなる分析には解釈的・質的データ収集によるtriangulationが求められる。

個人レベルの説明変数

- ・ Previous experience (過去の留学経験、英語使用経験など)
- ・ Intercultural communication and language fluency (英語力、英語によるコミュニケーション能力、授業の理解度)
- ・ Reasons for migration (留学目的、動機)
- ・ Personality (外向性・内向性)
- ・ その他 (年齢、性別、日本での身分、滞在中の身分、滞在先、留学期間、資金提供者、留学形式、今後の予定)

留学先コンテキストレベルの説明変数

- ・ Length of culture contact (在籍期間、ホームステイ先での交流)
- ・ Amount of intra- and intergroup contact (日本語または英語を使う交友時間)
- ・ Quality of intra- and intergroup contact (週末の過ごし方)
- ・ Social support network (現地で頼れる人の存在)
- ・ その他 (構内での英語使用徹底度)

出身国コンテクストレベルの説明変数

- ・ Economic factors (留学の大衆化、語学留学関連団体による宣伝)
- ・ Sociocultural factors (20代の英語・英語圏への漠然とした憧れ、現実逃避)
- ・ Political factors (ビザ緩和政策、カナダ留学のし易さ)
- ・ その他 (安全・「きれいな英語」・移民国というカナダへの好印象、など)

被説明変数

- ・ Psychological outcomes (達成感)
- ・ Sociocultural outcomes (交友関係構築度)
- ・ Behavioural outcomes (英語使用度とその積極性)

今後の研究展開

本稿の前半では今後実施する実証研究の理論的背景を概観し、後半では主にMacIntyre et al. (1998)のWTC in a L2モデルとWard (1996)に整理されているacculturation processモデルを考察する中で、本研究の理論的枠組みとして取り入れるべき変数を見極めた。今後はこの理論的基盤を元に、日本人留学生、日本人カウンセラー、現地責任者の三者と対象とした予備調査、本調査、参加校への教育的フィードバック、総括、と進行していく。英語圏語学学校という特定のコンテクストにおける視座から異文化コミュニケーション学と第二言語習得学の両分野を結ぶ本研究にとって、最終段階の教育的提言は形式だけのものではなく現場への価値あるフィードバック提供を目指す。語学留学に向けての異文化教育トレーニング分野(田中、2000;Cohen et al., 2003)、異文化トレーニング一般(Paige, 2003)、第二言語学習教室におけるグループダイナミクス研究(Dornyei & Malderez, 1997; Ehrman & Dornyei, 1998)、さらに両分野をつなげた実践報告(田崎、2002)などは本研究の教育的示唆という最終課題に寄与することが多いと思われるが、本研究独自のコンテクストを踏まえながら今後の研究展開と合わせ、研究と現場とのつながりを模索していく必要がある。

参考文献

- 浅井亜紀子 (2002) 「文化移動に伴うインド人留学生の自己再構築—身体化した自己と受容認知の視点から—」『異文化コミュニケーション』5, pp. 1-17.
- 倉八 順子 (2002) 「多文化間コミュニケーションを可能にするもの」『多文化教育を拓く—マルチカルチュラルな日本の現実のなかで—』 pp. 172-193. 明石書店
- 戴 エイカ (1999) 『多文化主義とディアスポラ』明石書店
- 田中 共子 (2000) 『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』ナカニシヤ出版
- 田崎 敦子 (2002) 「英語を共通言語とした大学院における異文化間コミュニケーションクラスの試み—タスク活動における教師の役割」『異文化間教育』16, pp. 140-150.
- 坪井 健 (1999) 「留学生と日本人学生の交流教育—オーストラリアとの比較を通して」『異文化間教育』13, pp. 60-74.
- 馬淵 仁 (2003) 『「異文化理解」のディスコース—文化本質主義の落とし穴』京都大学学

術出版会

- 箕浦 康子 (1984) 『子供の異文化体験』 思索社
- 箕浦 康子 (2003) 「文化接触研究の理論化に向けて—構築主義の立場から」 『子供の異文化体験—人格形成過程の心理人類学的研究』 新思索社
- 箕浦 康子 (2004) 「構築主義的異文化接触研究にむけて」 『第25回異文化間教育学会大会抄録』, pp. 25.
- 八島 智子 (2004a) 『第二言語コミュニケーションと異文化適応—国際的対人関係の構築をめざして』 多賀出版
- 八島 智子 (2004b) 『外国語コミュニケーションの情意と動機—研究と教育の視点』 関西大学出版部
- Allen, H.W. & Herron, C. (2003). "A mixed-methodology investigation of the linguistic and affective outcomes of summer study abroad." *Foreign Language Annals*, 36(2), 370-385.
- Armstrong, G. K. (1984). "Life after study abroad: a survey of undergraduate academic and career choices." *The Modern Language Journal*, 68(1), pp.1- 6
- Arthur, N. (2001). "Using critical incidents to investigate cross-cultural transitions" *International Journal of Intercultural Relations*, 25, pp.41-53.
- Babiker, I. E., Cox, J. L., & Miller, P. M. (1980). "The measurement of culture distance and its relationship to medical consultation, symptomatology and examination performance of overseas students at Edinburgh University." *Social Psychiatry*, 15, pp.109-116.
- Beebe, L. M. (1988). "Five sociolinguistic approaches to second language acquisition." In L. M. Beebe (Ed.), *Issues in Second Language Acquisition: Multiple Perspectives* (pp.43-77). Rowley, Mass: Newbury House Publishers.
- Beebe, L. M., & Giles, H. (1984). "Speech-accommodation theories: a discussion in terms of second-language acquisition." *International Journal of the Sociology of Language*, 46, pp.5-32.
- Beebe, L. M., & Zuengler, J. (1983). "Accommodation theory: an explanation for style shifting in second language dialects." In N. Wolfson & E. Judd (Eds.), *Sociolinguistics and Language Acquisition* (pp.195-213). Rowley, Mass: Newbury House Publishers.
- Berry, J. W., & Kim, U. (1988). "Acculturation and mental health." In P. Dasen, J. W. Berry, & N. Satorius (Eds.), *Health and Cross-cultural Psychology* (pp. 207-236). London: Sage.
- Bochner, S, McLeod, B. M., & Lin, A. (1977). "Friendship patters of overseas students: a functional model." *International Journal of Psychology*, 12(4), pp.277-294.
- Cheng, X. (2000). "Asian students' reticence revisited." *System*, 28(3), pp.435-446.
- Church, A. (1982). "Sojourner adjustment." *Psychological Bulletin*, 91, pp.540-572.
- Cohen, A. D., Paige, R. M., Kappler, B., Demmessie, M., Weaver, S. J., Chi, J. C., & Lassegard, J. P. (2003). *Maximizing Study Abroad: A Language Instructor's Guide to Strategies for Language and Culture Learning and Use*. Minneapolis, MN: Center for Advanced Research on Language Acquisition, University of Minnesota.
- Crealock, E., Derwing, T. M., & Gibson, M. (1999). "To homestay or to stay home: the Canadian-Japanese experience." *TESL Canada Journal*, 16(2), pp.53-61.
- Dornyei, Z. (1990). "Conceptualizing motivation in foreign-language learning." *Language Learning*, 40(1), pp.45-78.
- Dornyei, Z., & Malderez, A. (1997). "Group dynamics and foreign language teaching." *System*, 25(1), pp.65-81.
- Ehrman, M. E., & Dornyei, Z. (1998). *Interpersonal Dynamics in Second Language Education: the Visible & Invisible Classroom*. Thousand Oaks: Sage.

- Furnham, A., & Bochner, S. (1986). "Social difficulty in a foreign culture: an empirical analysis of culture shock." In S. Bochner (Ed.), *Cultures in Contact* (pp. 161-198). Oxford: Pergamon Press.
- Gardner, R. C. & Lambert, W. E. (1959). Motivational variables in second language acquisition. *Canadian Journal of Psychology*, 13, pp.266-272.
- Giles, H. (1978). "Linguistic differentiation in ethnic groups." In H. Tajfel (Ed.), *Differentiation Between Social Groups* (pp. 361-393). London: Academic Press.
- Giles, H., Bourhis, R. Y., & Taylor, D. M. (1977). "Toward a theory of language in ethnic group relations." In H. Giles (Ed.), *Language, Ethnicity and Intergroup Relations* (pp. 307-348). London: Academic Press.
- Gudykunst, W. B., & Kim, Y. Y. (2003). *Communicating with Strangers: an Approach to Intercultural Communication*, New York: McGraw-Hill Companies.
- Ha, P. L. (2004). "University classrooms in Vietnam: contesting the stereotypes." *ELT Journal*, 58(1), pp.50-57.
- Hinenoya, K., & Gatbonton, E. (2000). "Ethnocentrism, cultural traits, beliefs, and English proficiency: a Japanese sample." *The Modern Language Journal*, 84(2), pp.225-240.
- Iwakiri, M. (1993). "Effects of a study abroad program on the English development of Japanese college students." *JACET Bulletin*, 24, pp.41-60.
- Joseph, J. E. (2004). *Language and Identity: National, Ethnic, Religious*. New York: Palgrave Macmillan.
- Kinginger, C. (2004). "Alice doesn't live here anymore: foreign language learning and identity reconstruction." In A. Pavlenko & A. Blackledge (Eds.), *Negotiation of Identities in Multicultural Contexts* (pp. 219-242). Clevedon: Multilingual Matters Ltd.
- Kinnell, M. (ed). (1990). *The Learning Experiences of Overseas Students*. Buckingham: Open University.
- Knight, S. M., & Schmidt-Rinehart, B. C. (2002). "Enhancing the homestay: study abroad from the host family's perspective." *Foreign Language Annals*, 35(2), pp.190-201.
- Kobayashi, Y. (2001). "The learning of English at academic high schools in Japan: students caught between exams and internationalisation." *Language Learning Journal*, 23, pp.67-72.
- Kubota, R. (1998). "Ideologies of English in Japan." *World Englishes*, 17(3), pp.295-306.
- Kubota, R. (1999). "Japanese culture constructed by discourses: implications for applied linguistics research and ELT." *TESOL Quarterly*, 33(1), pp.9-35.
- Kumaravadivelu, B. (2003). "Problematising cultural stereotypes in TESOL." *TESOL Quarterly*, 37(4), pp.709-719.
- Lee, K., & Wesche, M. (2000). "Korean students' adaptation to post-secondary studies in Canada: a case study." *The Canadian Modern Language Review*, 56(4), pp.637-689.
- Leki, I. (2001). "'A narrow thinking system': nonnative-English-speaking students in group projects across the curriculum." *TESOL Quarterly*, 35(1), pp.39-68.
- MacIntyre, P. D., Babin, P. A., & Clement, R. (1999). "Willingness to communicate: antecedents & consequences." *Communication Quarterly*, 47(2), pp.215-229.
- MacIntyre, P. D., Baker, S. C., Clement, R., & Donovan, L. A. (2002). "Sex and age effects on willingness to communicate, anxiety, perceived competence, and L2 motivation among junior high school French immersion students." *Language Learning*, 52(3), pp.537-564.
- MacIntyre, P.D., Clement, R., Dornyei, Z., & Noels, K. A. (1998). "Conceptualizing willingness to communicate in a L2: a situational model of L2 confidence and affiliation." *The Modern*

- Language Journal*, 82(4), pp.545-562.
- Masgoret, A., & Gardner, R. C. (2003). "Attitudes, motivation, and second language learning: a meta-analysis of studies conducted by Gardner and associates." *Language Learning*, 53(1), pp.167-210.
- Matsumura, S. (2001). "Learning the rules for offering advice: a quantitative approach to second language socialization." *Language Learning*, 51(4), pp.635-679.
- McKay, S., & Wong, S. L. (1996). "Multiple discourses, multiple identities: investment and agency in second-language learning among Chinese adolescent immigrant students." *Harvard Educational Review*, 66(3), pp.577-608.
- Miller, J. (2004). "Identity and language use: the politics of speaking ESL in schools." In A. Pavlenko & A. Blackledge (Eds.), *Negotiation of Identities in Multilingual Contexts* (pp. 290-315). Clevedon, Avon: Multilingual Matters Ltd.
- Murray, G. L. (1999). "Autonomy, technology, and language-learning in a sheltered ESL immersion program." *TESL Canada Journal*, 17(1), pp.1-15.
- Oberg, K. (1960). "Culture shock: adjustment to new cultural environments." *Practical Anthropology*, 7, pp.177-182.
- Paige, R. M. (2003). "Intercultural education and training for the 21st century: global issues and challenges." *Journal of Intercultural Communication*, 6, pp.1-8.
- Pavlenko, A., & Blackledge, A. (2004). "Introduction: new theoretical approaches to the study of negotiation of identities in multilingual contexts." In A. Pavlenko & A. Blackledge (Eds.), *Negotiation of Identities in Multilingual Contexts* (pp. 1-33). Clevedon, Avon: Multilingual Matters Ltd.
- Pavlenko, A., Blackledge, A., Piller, I., & Dwyer, M. T. (Eds.). (2001). *Multilingualism, Second Language Learning, and Gender*. Berlin: Walter De Gruyter Inc.
- Pon, G., Goldstein, T., & Schecter, S. R. (2003). "Interrupted by silences: the contemporary education of Hong-Kong-born Chinese Canadians." In R. Bayley & S. R. Schecter (Eds.), *Language Socialization in Bilingual and Multilingual Societies* (pp.114-127). Clevedon: Multilingual Matters Ltd.
- Sakamoto, M., & Kobayashi, Y. (in preparation). "Revisiting the notion of cultural distance: case studies of Chinese students in Japan and in Canada." Manuscript prepared for publication.
- Schmidt-Rinehart, B.C. & Knight, S.M. (2004). "The homestay component of study abroad: three perspectives." *Foreign Language Annals*, 37(2), 254-262.
- Selmer, J. & Shiu, L. S. (1999). "Coming home? Adjustment of Hong Kong Chinese expatriate business managers assigned to the People's Republic of China." *International Journal of Intercultural Relations*, 23(3), pp.447-465.
- Siegal, M. (1995). "Individual differences and study abroad: women learning Japanese in Japan." In B. F. Freed (Ed.), *Second Language Acquisition in a Study Abroad Context* (pp.225-244). Philadelphia: John Benjamins.
- Swain, M., & Miccoli, L. S. (1994). "Learning in a content-based collaboratively structured course: the experience of an adult ESL learner." *TESL Canada Journal*, 12(1), pp.15-28.
- Taguchi, T. (2002). "Learner factors affecting the use of learning strategies in cross-cultural contexts." *Prospect*, 17(2), pp.18-34.
- Tajfel, H. (1974). "Social identity and intergroup behavior" *Social Science Information*, 13, pp.65-93.
- Tajfel, H. (1981). "Social stereotypes and social groups." In J. Turner & H. Giles (Eds.), *Intergroup*

- Behavior* (pp. 144-165). Chicago: University of Chicago Press.
- Talbut, S., & Stewart, M. A. (1999). "What's the subject of study abroad?: race, gender, and "living culture"." *The Modern Language Journal*, 83(2), pp.163-175.
- Tsang, E. W. K. (2001). "Adjustment of mainland Chinese academics and students to Singapore." *International Journal of Intercultural Relations*, 25, pp.347-372.
- Ward, C. (1996). "Acculturation." In D. Landis & R. S. Bhagat (Eds.), *Handbook of Intercultural Training* (pp. 124-147). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Ward, C, Bochner, S, & Furnham, A. (2001). *The Psychology of Culture Shock*, Hove, East Sussex: Routledge.
- Ward, C., Okura, Y., Kennedy, A., & Kojima, T. (1998). "The U-curve on trial." *International Journal of Intercultural Relations*, 22, pp.277-291.
- Warden, C. A., & Lin, H. J. (2000). "Existence of integrative motivation in an Asian EFL setting." *Foreign Language Annals*, 33(5), pp.535-547.
- Wen, W.P. & Clement, R. (2003). "A Chinese conceptualisation of willingness to communicate in ESL." *Language, Culture and Curriculum*, 16(1), pp.18-38.
- Wendt, M. (2002). "Context, culture and construction: research implications of theory formation in foreign language methodology." *Language, Culture and Curriculum*, 15(3), pp.284-297.
- Wilkinson, S. (1995). *Foreign Language Conversation and the Study Abroad Transition: a Case Study*. Unpublished doctoral dissertation, The Pennsylvania State University, Pennsylvania.
- Wilkinson, S. (2001). "Beyond classroom boundaries: the changing nature of study abroad." In R. Z. Lavine (Ed.), *Beyond the Boundaries: Changing Contexts in Language Learning* (pp.81-105). Boston: McGraw-Hill Higher Education.
- Wilkinson, S. (2002). "The omnipresent classroom during summer study abroad: American students in conversation with their French hosts." *The Modern Language Journal*, 86(2), pp.157-173.
- Williams, G. (1992). "Ethnolinguistic vitality." In *Sociolinguistics: a Sociological Critique* (pp. 206-226). New York: Routledge.
- Yashima, T. (2002). "Willingness to communicate in a second language: The Japanese EFL context." *The Modern Language Journal*, 86(1), pp.54-66.
- Yashima, T., & Tanaka, T. (2001). "Roles of social support and social skills in the intercultural adjustment of Japanese adolescent sojourners in the USA." *Psychological Reports*, 88, pp.1201-1210.
- Yashima, T., Zenuk-Nishide, L., & Shimizu, K. (2004). "The influence of attitudes and affect on willingness to communicate and second language communication." *Language Learning*, 54(1), pp.119-152.
- Zhang, L. J. (2001). "Exploring variability in language anxiety: two groups of PRC students learning ESL in Singapore." *RELC Journal*, 32(1), pp.73-91.